

動物園をもっと知ろう!



今回の91号では、動物園で保護した野鳥を自然に帰す活動の一例と絶滅のおそれのある動物を保護するワシントン条約についてわかりやすく記事にしてみました。

特集1

チゴハヤブサの野生復帰物語

札幌市内の住宅街でも、夏になると数多くのチゴハヤブサ達が巣をつくれます。彼らは環境の変化にうまく対応して生活します。ただ、巣立ち直後のヒナは親から飛び方や狩の方法を学びながら成長しますが、たまたま親が離れている時、飛べずにいるヒナを発見した人間が誤って保護してしまうことがあります。

動物園で引き取るヒナのほとんどはケガはなく健康体なので、自然に帰さなければなりません。

自然に帰すには親から何も学んでいないヒナにいろいろ教える必要があります。ここでは円山動物園で行っている訓練の様子を紹介します。



4

1 最初の訓練

訓練の最初は、鳥の足に皮ヒモをつけ、人の手の上でエサを食べさせます。

これから人の手により訓練を行っていくわけですから、まず人に馴れてもらいます。



2 体重管理

訓練で一番大切なのは体重管理です。たった5gの体重の変化でもエサに対する鳥の反応は変わってしまいます。

慎重に体重を管理することにより訓練はスムーズに進みます。



3 ジャンプアップ訓練

床の台に止まらせた鳥を、手元までジャンプさせます。鳥は垂直に飛ぶ時、筋力とスタミナを非常に使います。

このジャンプの回数を増やしていき、最終的には200回位まで行います。

この訓練により野生で十分暮らしていけるだけの筋力とスタミナがつかます。



スズメ

4 捕獲訓練

スズメを捕まえる訓練です。この時期はチゴハヤブサが野生で食べている小鳥や昆虫をエサとして与え、何が獲物でどうやって食べるのかを学ばせます。

5 放鳥

このような訓練を毎日行い、9月中旬頃、チゴハヤブサのエサであるトンボがたくさん飛んでいる時期に自然に帰します。

6 追記

放鳥後、このチゴハヤブサがすぐにトンボを捕獲する姿を確認できましたし、それから2週間後にもこの個体を確認できましたので、無事に野生復帰できたようです。

このように自然に帰した鳥たちが一羽でも多く野生で無事に生き抜いてくれることが私たちの職員の大きな願いです。

ベラルーシの子供たち来園!!

キリル君とイハル君が感動!



1986年に起きたチェリノブイリ原発事故の後遺症に苦しむベラルーシ共和国の子供たちが、日本で療養するために今年も北海道にやってきました。

ベラルーシにいるほとんどの子供たちは動物園にいる動物を見たことがないので、10月17日にキリル君(10歳)とイハル君(10歳)を円山動物園に招待しました。

二人とも初めて見る動物ばかりだったようで、とても喜んでくれました。

※これはNPO法人「チェリウス」の支援により実現しました。

